# 酒呑童子絵巻　翻刻・略解題

長谷川　端

## 略解題

『酒呑童子絵巻』あるいは『酒呑童子絵詞』は、逸翁美術館に蔵する、鎌倉末・南北朝期制作とされる『大江山絵詞』[1]をはじめとして、多くの絵巻が現存する。[2]ここに紹介する絵巻は、近時、書肆の目録に掲載され、中京大学図書館に蔵するものである。

次に、簡単な書誌を記す。

所蔵　中京大学図書館

時代　室町後期写

表紙　雲形織布　二四・〇糎

題箋　しゅてんたうし　縦一四・八糎　横三・〇糎

見返し　金銀箔・霞の模様入り

内題　しゆてんとうしの物語
寸法　紙高三〇・〇糎　長さ一八七四糎
料紙　裴紙
字高　二七・〇糎
奥書　なし

本書は大型奈良絵本を絵巻に改装したもので、元の冊子は墨付四三丁袋綴、幅二三・〇糎～二三・五糎、一筆書写の作品であったことが、料紙に残された綴穴[3]および第八十六紙右下に残る「四十三」という墨書から知られる。

挿絵は二十七図あり、第一図や第二図のように、当該の丁の途中から挿絵が描かれているところや、第三・四・五・六図のように、異った場面がひと続きに描かれる箇所や、第二十七図のように、長尺で五紙に及ぶ一場面が描かれている所もある。画中には、本文と同筆で人物名が記入され（誤っている箇所もある）、時には、第八図・第二十六図のように場面の簡単な説明と思われる記述がなされているところもある。

文章は比較的簡略であり、大江山系酒呑童子の物語群の中に類似の写本は存在しないようである。一、二、特徴ある箇所をあげると、渡辺綱の物語は詳細であり、伝承との関係が考えられ、千丈ヶ嶽の岩屋に三神が再び現われて頼光の一行に助勢する所や、酒呑童子の岩屋を揺り動かす目覚め方に特異なものがある。

翻刻に際しては、読み易さを考えて、読点を適宜施し、段落を比較的多く作った。猶、文中の□印は、手擦れによる汚れや難読箇所を示し、「」内は私によるものである。また、└印は、冊子本を絵巻物に改装する前の、丁末であることを示す。

注

（1）『続日本の絵巻』の編者小松茂美氏は、同シリーズ26『土蜘蛛草紙　天狗草紙　大江山絵詞』（一九九三・三中央公論社刊）の解説の中で、本書の出版に先立つ『続日本絵巻大成』19に収められた榊原悟氏の研究（「『大江山絵詞』小解」）にいう、「本絵詞の制作を南北朝時代末期より室町極初期と考えて大過ないであろう」とする見解に、詞書の書風から多少の変更を加えて、「この『大江山絵詞』の製作は鎌倉時代の末期、十四世紀初めのころと推断して、ほぼ誤るところではあるまい」とされた。

（2）横山重・松本隆信両氏の編纂にかかる『室町物語大成』の中には、その巻第三に、

七二　大江山酒呑童子（逸翁美術館古絵巻）

七三　大江山しゅてん童子（慶応義塾図書館蔵絵巻）

七四　大江山酒典童子（麻生多賀吉氏蔵巻子本）

の三本が翻刻・紹介されている。

（3）第八紙左側に五箇所の綴穴が残されていることから、綴穴は五箇所だったことが判明する。この他にも、第十八紙左隅、第十九紙右隅、第三十七紙右隅、第五十三紙左隅、第七十一紙左隅、第七十二紙右隅、第八十一紙左隅、第八十三紙右隅などに綴穴の存在が確認される。元の冊子の状態では、当然のことながら、奇数紙には右側に、偶数紙には左側に綴穴が存在する筈である。このことからだけでも、何箇所かの錯巻が推測される。一例をあげれば、第六十紙がそうであり、第六十紙と第六十一・六十二紙（絵第十四図）は、元来はもっと前に位置していたものである。また、何箇所かの絵は、改装時に、意識的にまとめられたと推定される。第十六図～第二十二図で考えるならば、第十六図と第十七図が同一箇所、第十六図から二十二図が他の一箇所に

配されていたとおぼしい。

## 翻刻

しゆてんとうしの物語

そもそもわかてうと申ハ、かミの御よよりはしまりて、てんちん七たい、ちゝん五たいなり、にんわう六十六たいの御かとを一てうのゐんと申たてまつる、まつたいとハ申なから、ふつほうはむしやうし、わうほうさかんなり、てんかにふうゝなんあらされハ、こゝくふようにして、しかひなミしつかなり、されはミやこにハ、くハさひ、たうせんをそれなく、十はうのたのしミ、いゑハいらかをならへ、ひまなし、さしんふけいのミならす、たくミなむとみちみちたり、□[た欠]ミやさう人まて、ふしきのさうあり、この御よにいて、ちやうたいにもきかす、まつたいとてあるへからすと、ときの人申あくる

しかりとハ申せとも、くきやう、大しん□[の脱欠]

ミやこのうちにハ、みめよき女人うする事かすをしらす、はしめ五十にんハ、その身のふてうか、又とんせいのくわたてかなんとゝ、なけきかなしむはかりなり

こゝにいけたのちうなこん、くにかたのきやうと申ハ、たいミやう、ふくにんにましませハ、なにはにつけて、御こゝろまかせすといふ事なし、しかりとハ申せとも、あらきかせにもあてしとおほすひめきミ、あるよ、かきくれてましまさす、くにかたをはしめたてまつり、きたの御かた、らうたうまて、なけきかなしむはかりなり

それ、にんけんのならひにて、五にん十にんあるをさへ、わかれとなれハものうきに、ましてや申さむ、くにかたハ、ひとりひめの御ことにて、なけき給ふもたうりなり

そのころ、ミやこに、せいめいと申はかせ一人」[2]あり、しかるへくハ、せいめいをめされ、うらなわせ、ひめきミの御さところ、御たつねあれと申、さらハせいめい、御つかひたまハり、くにかたにまいる、くにかたいてあひて、たいめんあり、御ことをこれまてめす事、よのしたひにてなし、そんしのことく、くわしよく身にあまり、なにはにつけて、こゝろにまかせすといふ事なし、しかりと申せとも、あらきかせにもあてしと思ふ、ひめきミをうしなひ、むねんさ申はかりなし、しかるへくハ、せいめひのふうにて、ふうしかへし、かハらぬすかたを、いま一と見せてたへ、ことにこれ、よろこひとなるならは、かすのたからをつますへし、かす〳〵、とうミやう□[り欠]ようとて、まんひきをくりつかハし給ふ、せいめいうけた□[ま欠]ハり、りやうしやう申、わか屋にかへり、七日しやうしけつ□[さ欠]」[3]いし、よくうらなひかへ、くにかたにまいり申、ひめきミの御さところうらなひ申て候、ミやこのうちにハましまさす、□[こ欠]れよりもはるかきた、たんはのくに、おほえ山、せんちやうかたけと申ハ、すなハち、おにのあるところなり、かのおにのしよいにて候、ひめきミ、いまたしゝたまハす、わかしんつうのふうにて、おにをハよく〳〵ふうしつゝ、かハらぬすかたを、いま一と御たいめんの御こと、又うたかひなし、くにかた、とこそ申けれ、くにかたなのめにおほしめし、そうもん申されけれハ、

［絵　第一図］

晴明、国方の卿・北の御かたの前で語る」[4・5]

ひたりの大しん、すゝみいて、申さるゝ、むかしも、さる事□[の欠]あるよしうけたまハりて候なり、一とせ、さかのていわうの御とき、にんミんおほくうせけるを、くきやう、大しんにおほせて、てうふくせさせたまひてのち、人をとる事やミにけり、いまハ、さやうにしかるへき、たつとき人もましまさす、さもおほしめされは、ふけいのたいしやうをゑらミ、たち、たるき[つ欠]にてたいちあるならは、てんかたいへひ、こくとあんせむ、たミもゆたかに候へし、御かとへそうし申されたり

みかとゑいらんあり、さて、かのおにのうつてにハ、なにものかむくへき、くきやう、大しんそうもんある、たれたれと申とも、ほんてうのうちに、らいくわうにましたるゆミとり、ありつへきともそんせす、しかるへくハ、らいくわうめされ、└6せんしをくたされ候、さらは、ちよくしをたてよとて、らいくわうかやかたに、ちよくしたつらいくわう、せんしをかふむり、しやうそくひきつくろひ、やかてさんらい申、かたしけなくも、みかとより、きよくれんをあけさせ、くにかたのきやうをもつて、せんしをくたしたまふ

いかにらいくわう、なんちちよくめいをうけ、ほんまうをしかひにほとこし、いせいをてんかにふるまう事、とゝにおよへり、しかりといへとも、まつりことをろそかなるによ□[て欠]、ふしきのことこそいてくれ、それをいかにと申に、たんはのくに、おほえやま、せんちやうかたけに、おにともあつまり、人をとり、うしなふ事、てんかのなけき、これにすきす、いそきまかりむかへ、おにをほろほしまいれとや、とくとく、とのせんしなり、よりミつ└7うけたまハり、つし[、脱]んてこんミやう中、ちよくちやうの事、そくはうの御てうてきをほろほす事、とゝにをよへり、それハにんけんのこと、かのおにと申ハ、ろくつうしさいのものにて候へは、なにとして、たやすくほろほさむ事、おもひよらす、さりなから、せんしをいさい申せは、おそれにて候あひた、御うけを申、わかやにかへりけり

［絵　第二図］

頼光、勅をうけたまわる」[8・9]

つな、きんときをちかつけ、それかしハ大りにまいり、たいちのせんしをかうふりたり、それをいかにと申に、たんはのくに、おほえやま、せんちやうかたけに、おにともあつまり、人をとり、うしなふこと、てんかのなけき、これにすきし、いそきまかりむかひ、鬼をほろほせとのせんしをかうふり、かのおにと申ハ、ろくつうしさいのもの、それハなにとしてたやすくほろほさん事、おもひもよらす、さりなから、わたくしにあらす、こくとのために候へは、しよてんもちからをそへたまはぬ事あらしと、きちにちをゑらミ、やわたのおやまにさんろうあり、きせいふかくそ申さるゝ、つな、きんときハすミよしとのへまいり、さたミつ、すゑたけ、くまの三しよをくわんしやう申、

さまさまの御むさうをかうふり、すゑたのもしく、はかり事をそいたされける」[10]

［絵　第三図］

頼光、綱・公時・末武に宣旨の趣きを語る」[11]

［絵　第四図］

頼光・八幡山に詣でる」[12]

［絵　第五図］

綱・公時、住吉に詣でる」[13]

［絵　第六図］

貞光・末武、熊野の三所に詣でる」[14]

たうたいおほくまします、きやくそうのまなひをし、おひをし、おひにひやうくをいれ、かのやまにむかひ、たはかつてうつへきに、なにのしさいのあるへきそ、はやうつたちたまへと、おほせけるらいくわうのおほせにハ、あかちのにしきのひたたれに、ひをとしのおほよろひ、しゝわうといふかふと、こて、こくそくをいれたりける

さて、つき〳〵の人々、とかくのたうくをいれ、やまぶしのはうにハ、さゝへとなつけ、大たけをきらせ、ミやこのさけをいれされ、すミなれたまひたる、はなのミやこをは、またよをこめておたちありめいしよ、きうせきをうちすきて、いそかせ給ひけるほとに、そのなもおとておそろしき、たんはのくにきこえたる、おほえ山のふもとに、ほとなくつかせたまひけりやま」[15]のふもとにゆきて見れハ、しやうきあまた見えたりやとからはやと思ひ、つなたちより、われハしよこくい□[つ]けんのきやくそうにて、一やのやとをかし給へ、うちよりも、おきな三人たちいて、これハいかなるところとおほしめすそ、これこそおとにきこえたる、たんはのくに、おほえ山、せんちやうかたけ、おにのいはやのへんとにて、にんけんの、たやすくおハしますへきところにてハ候ハす、あれ御らんせよ、むかいに見えたる山こそ、せんちやうかたけにて候、とふとりも、そらをかけりかたし、このところも、おにのすむ[マヽ]かちかけれハ、つねにけんそくたちいつる、きやくそうの御すかたを見たてまつるに、人にてハましまさす、こなたへ御いり候へと、一夜のやとをまいらする

よすから」[16] 御ものかたり、[あり脱欠]あかつきかたの事なるに、おきなおほせけるやう、きやくそうのすかたを見たてまつる、たゝ人ならす、御こゝろをおかす、御ものかたり候へ、ミちすから、あんないをつかまつり候へし、ありのまゝ、おほせけり、おきなきこしめし、けにやさしくも、おほしめしたち給ふものかな、かのおにと申ハ、たいしやにて候、さけにたにゑひぬれハ、わかミのうするをもしらす、うちとけ、あそひさふらふ、これなるさけをまいらする、これハ、おそろしきとくのさけにて候そ

らいくわうにたひ給ふ、そのゝち、おきな、はふ〳〵かふとをとりいたし、かのおにと申ハ、つうをえて、ものをしる、このかふをときんのしたにきるならハ、御すかたを、さたかに見わける事かたしと、らいくわう」[17] にたひ給ふ、よりミつなのめにおほし、やかて、ときんのしたにめされけり

かくて三人のおきな、ミちしるへをめされけり、い上九人の人々、いそかせたまひけるほとに、ほりのはたにつき給ふ

［絵　第七図］

頼光、綱、公時、保昌、貞光、末武、三神に導かれる」[18・19・20]

なかのけしきをミたまへは、ふかくして、そこ見えす、にんけむの、たやすくかよふへきやうなかりしを、三人のおきな、てう、とんはうのことくに、ひら〳〵ととひこゑ、いハきのありしをひきおこし給ひ、ほりのこしにうちわたし、はやくわたらせ給ふへし、きやくそうたち、そこ三ちやうある、六人の人々、めむ〳〵に、たやすくうちわたり、むかひのきしにつきしかハ、せんちやうのたけを見めくれハ、はんしやく、くもにそひえ、いはやさかし

くし、さなか□[ら欠]ミちもなかりしを、やすやすとふミとほり、かんくつにつき給ふ
かんくつのうちにいりしより、月ひもひかりおかまれす、さなから、ちやうやのことくなり、こゝろとせんとし[徒然]、せんたちをたのミて、とゝろ〳〵とゆき給ふ、ものによく」21たとふれハ、かのたうの、一きやうあしやり[一行阿闍梨]、むしちのとかによりたまひ、あんけつたうへおとされしも、かくやと思ひしられたり、かんくつをすき、へい〳〵とあるはうへいつるを、つなかれいつるおきなおほせける、この川につき、のほらせ給へハ、ミちにて人にあふならハ、くハしくたつねたまふへし、われをたれとかおもふらん、につほんのあるし、てんせうたいしん、くまのゝこんけん、しやう八まん、われにてあり、うちこをしゆこのために、これまてミちをしへにきたりたり、いとま申て、さらハとて、三人のかミたちハ、かきけすやうにうせにけり

［絵　第八図］
千丈ヶ嶽にて、三神、頼光一行と別れる
左に「鬼のすみか」の門が見える」22・23・24

六人の人々に[マヽ]ミやこのかたをふしおかミ、をしへのことくゆきて見れハ、としのよハひ、はたちはかりなる、ねうはうの、ちのそうたるきぬをあらひて、なけきたる、つなたちより、御つほねハ、なにをなけき給ふそ、御つほねきこしめし、なふきやくそう、これをはいかなるところと、おほしめすそ、これこそおとにきこえたる、たんはのおほえ山、せんちやうかたけと申所なり、はや〳〵かへらせたまへ、ミつからハいかなるものと、おほしめすそ、ミやこのものにて候か、こそのはる、いはやにとられ、おにのしきもつとなるへし、ふしきにいままて、なからへ

さふらふ、おほかたミやこよりとられましますねうはうたち、三十よにんまします、かすとりをき候か、すこしこゝろにあきぬれハ、人やと申ところへ」[25]いれ、みよりあけちをしほり、さけとかうし、しゝむらをは、しきもつとつかまつり候、かやうに申ミつからも、いつと申、なんときかゝるうきみにあふへきやと、ころやすまるひまもなし、なかなかつゆのミともなりて、きえうせなは、かゝるうき身ハよもあらし、かひなきいのちをなからへ、てうせきものをおもハんより、たゝねかはくハ、きやくそうの、御あはれミさふらひて、みやこへくそくしたひたまへ、恋しく候ちゝはゝや、もりや、めのとに、いま一と、たいめん申候へし、なふ、ミやこひし[こ脱欠]のうき身やなと、きぬのたもとをかほにあて、きえゐるやうになき給ふ

つな、このよしうちきいて、あらいたハしや、ミやこ人にてましましける、かやうに申ものともも、ミやこのものにて候か、」[26]御かとのせんしをかうふりて、おにをほろほすものなれは、ミやこへ御とも申へし、おくのいはやのありやうを、御物かたり候へ、御つほねきこしめし、さてハ、恋しきみやこへかへらんことのうれしさよ、これをおくにゆき給へは、くろかねのもんのあたりにハ、さもおそろしきけんそくか、ひつしとなミゐて、はんをする、それをおくへゆきて見れハ、るりのくうてん、たまのらうか、しはうに四きをまなひ、まつ、ひかしハはるにて、むめ、さくらをうへをき、のきはをさそふうくひすの、はつねをなくも、めつらしや、みなみハなつにて、ふかんゐんまん、よろつののりをさへつりて、いしやうにハ、きんきむのいさこをしき、たまのつくをたくミ、まつにこかれるわかむらさき、すさ」[27]きにつくハ、かきつはた、かきのうの花、はなたちはな、とほくにさきみたれ、たんかはうこく[マヽ]、これ、うをのあそふありさまは、かりすのうへに、たまちとり、したにかはつのなきたるハ、なつのけしきと見えにけり

にしハあきにて、ききやう、かるかや、おミなへし、りんたう、はきのはな、まつむし、すゝむし、きりきりす、

りん〳〵と、なくハはたほ[を]りの、とを山かけのしかのねも、もみちのかけになきたるハ、あきのけしきと見えにけり、きたハふゆにて、まつのみとりいみしくも、むなしきゆきにうつまれて、いつミのうへもつら〻ゐて、かけひの水もおともせす、そらかきくもり、あられふり、かむちんくゐたれハ、とりのねくらと申へし、わつかにのこる物」[28]とてハ、にはのまかきの、しらきくや、うすむらさきのことくなり、大かたかやうのけしき、ひとへに、こくらくせかひもかくやと、思ひしられたり

つなき〻て、それハへんけ、しんつうのものなれハ、さこそあるへけれ、なを〳〵しやうのありさまを、御物かたり候へ、御つほねきこしめし、それをおくへゆきて見れハ、らふの御しよとなつけ、くろかねのたいりをたて、よもすから、ねうはうたちをなミすへ、さんかいのちんふつをそろへ、けんそくともにまひうたはせ、いねうかつかう、なかなか申はかりもなかりけり

けんそくのそのなかに、四てんわうとたのミしハおんからとうしと申、たいちからのおに、ともにろうのはんをせさせ、あるしハおにとハ申せとも、にんけんのめにハいつくしきとうしの」[29]すかたに見えさふらふか、なつけ、[て脱欠]しゆてんとうしと申なる、まことにちからもつよく、おそろしき事、おもてをむくへきやうもなし、かやうにちう〳〵のもん、くきぬきをハ、わつか六人して、御やふり候へきか、せんしハおりてさふらふとも、御たいちにておハششそ、あら、まことわすれたり、むかしかいまにいたるまて、かたしけなくも、せんしのくち[朽]することもさふらハす、ひとへにハわうい、ふたつにハゆミとりの御みやうか、三つにハねうはうたちの、三十よ人までのなけきのつもるところをは、いかてかふつしん三はうも、御あわれミなからんや、さあらんにおゐてハ、うちとりたまハん事の、うたかひあるへきそ、いまハはや、しこくもうつりなむ、とうしのとかめもおそろしや」[30]いとま申て、さらはとて、なミたをなかし、いはやのうちへ、かへりたまひけり

さて六人の人々ハ、ミやこのかたをおかミて、おにのしやうへゆきたりけり

［絵　第九図］

一行、川岸に衣を洗う「御つ［ぼ］ね」を見る」31・32

六人の人々、をしへのことく、ゆきて見れハ、くろかねのもんあり、まことにかくをハ、しゆてんとうしの、あさ〳〵とうつたち、もんのあたりにハ、さもおそろしきけむそく、かねのほこなんとをもち、ひつしとなみゐていたりける

この人々を見つけ、いちとにさしきをはらりとたつて、なにものなれハ、このところへきたりたるそ、あますな、もらすな、もつともとて、この人々をまんなかにおつとりこめて、見えたりけり、あるけんそくか申やう、しつまり給へ、かた〳〵、ふかくなり、かゝるふしきの事をハ、とうしの御かたへ申あけ、のちのさたにつかまつれ、かた〳〵いかに〳〵といひけれとも、これをもちゐす、一人に三人つつもとりつけハ、さはかりたけき人々も、かなふへき」33やうハなかりけり、つゐにせいにん（マヽ）せられけり

［絵　第十図］

頼光ら、廿人の眷属と闘う」34・35・36

しゆてんとうしに、かくと申、しゆてんとうしきゐて、うれしや、このほとハをんなはかりを、さけやさかなにつ

かまつれハ、めつらしからす、をのこハ、し、むらこハくして、ほねハすこしかたけれとも、あちはいあつて、おほえたり、なんちにおそれハ、し、むらかれ、ちもすくなふなるへし、よつくいたわれ、しきもつにせん、うけたまハり候とて、中のていへしやうしけり

や、あつて、しゆてんとうし、きやくそうにたいめんし、事のしさいを、けんふつせんとありしかは、しかるへう候と、まつさきいらひ[て欠]にいてたるものを見てあれハ、かミはあかうて、みあをくなるやとて、ひさをたて、たつ、はいするその、ち、おくのかたよりも、きりふりくもり、あられふり、身のけもよたつておほえたり、くわうミやうくわく」[39] やくのひかりをはなちいてたるを、つく〳〵と見たまへ、[ハ脱欠]かミはかふろにて、いろしろく、としのよハひにてあるならハ、四十はかりにうち見えたるか、からおり物のこそてをき、ゑかひたるひた、れに、くれなひのおほくちふミく、ミ、とうし二人のかたにか、り、ひたりみきを見まハし、さしきへゆるきいてたまひ、らいくわうのをハしますた、ミを、一けんへたて、さつとしたひしたまひて、さしきになをらせ給ひけり

六人の人々、このよしを御らんし、あら、けうさめや、これまてきたつてハ、にくるとものかすまし、いまやうつへき、又ひのくる、をやまつへきと、めと〳〵ときつと見あわせて、につことわらひをハします

この人々のありさま、しんゑんにのそつ[ん]て、はくへうをふむかことく」[38] なり

とうしのおほせに、きやくそう、このところえと申ハ、むかしより、きやくそうの、おこなひ給ふみねにてもなし、又ふミわけたるみちもあらはこそ、ミちにまよふてきたりつれ、これまての御いて、こ、ろへられすと申、かなたこなたを見、ふミまハせは、いよいよさしきハすさましきなり、あら、まことわすれたる、きやくそうの御いてハ、ねかうところのさいはひなり、御酒(さけ)をまいらせよとありしかは、うけ給と、しろかねのてうしに、こかねのさかつきとりいたし、とうしの御まへにかしこまる

さらぬていにて見たまへは、さきにおんなのかたりしことく、ちのさけを入て、けんしたり、しゆてんとうしのおほせに、まつきやくそうに申たくそ候へ、それかしのふて申さんと、たふ〳〵と三とほし、らい[39]くわうにさかつきさす、たうたいにいたるまて、きし□[ん欠]よりさきにのむ事、おにのみと申て、このときよりもいわれたり、らいくわうさかつきとりあけ、たふ〳〵とうけほすていにて、さつとすて、ほうしやうのひとりむしや、けこて候と申、もとよりつなハめいしんなり、たふ〳〵と三とほし、それよりしたいにさしてくたし、さかつきとかくすきぬ

しゆてんとうしの御まへ、まいる、らいくわうのおほせに、さためてこのへんは、ミやこのさけハめつらしからぬ御しゆを申とありしかは、うけ給候とて、おいのなかより、さゝへをとりいたす、しゆてんとうし、きこしめせ、わかよにあるしるしに、ミやこのさけをのまハやと、あけくれこれをねかひしに、御こゝろさしこそうれしけれと、大きに[40]よろこひ給ふ

つなハ御しやくにまいり、はしめ二三とも、ミやこのさけをもり、のちにハ、くたんの八幡よりたまハりたる、とくのさけをつきかへおハしつゝ、しひけれハ、ミやこのさけにみきはまして、こうミ、あちはいおもしろしと、さしうけ〳〵のミたりけり、しゆてんとうしのおほせに、おなしくハ、それかしかさいあひのものをよひいたし、ミやこのさけをのませハやと、くにかたのきやうのひめきミをよひいたし申せは、つなこゝろへて、この人々にハミやこのさけをまいらする

かくて、しゆてんとうしのとくのさけも、ゑいぬれハ、いかにきやくそうきこしめせ、それかしかすかたを、いまてかくし申せとも、かやうに御なさけふかくまします[41]うへ、いまハなにをかつゝむへき、御物かたり、われハにんほんこくにすみ、ふつほう、わうほうをさまた、わかよのまゝとあらんと、あるときハ、てんたいさんにのほり、そのたけ十六ちやうのくすの木とへんし、又うつくしきとうしとなり、人をたふらかし、さま〳〵あくきやう[け脱欠]

をいたすところに、されともわうほうさかむにて、てんたいさんのいたされ、このやまを見てあれハ、か、とにひ[マヽ]
へて、にんけんのかよふへきやうあらされハ、あつはれ、それかしかすみかなりとこゝろえて、これにさいしよを
こしらへ、けんそくともに申つけ、らくちう、らくくわひの人をむかへとり、こゝろをなくさめ、月ひをくり候
しに、一とせさかのてんわうの御とき、てんけう大しと申大あく」[42]そうのおこのものにてうふくせられ、このや
まうをくたされ、大みね、かつらきなんと申山々にこもり、てんきう大しひゑひさんをたてをき、にうちやうしけ[マヽ]
れは、いまハおそろしきものもなく、又このやまにかへりけり、きのうけふのやうに思ゑとも、もゝとせとおほえ
たり、なふ〳〵、きやくそうと、かたりけり
ミやこのおもしろきをも、ゐなからちやうちうにハあらハし、さんかいのちんふつにあきみち、わか身なからも、
すいふんのくわほうのものとおもひ、さりなから、こゝろにかゝるものあり、ミやこにちゆるむしや、なをハらい
くわうとなつけ、きみの御まほりとなり、ちゑさいかく人にすくれ、むかふてうてきをほろほしたきといふ事な
し、かれかうちに、つなとなつけた□、」[43]おとらぬゑせものあり、このものともハ、つゐにそれかしかかたきと
ならんすものにてあり
とうしかけんそくに、ひらきと申ものあり、このものに申つけつるを、うしなへといひけれハ、ひらきミやこにの
ほり、たひ〳〵つなをまちかくる、あるとき、つな、一てうもとりはしをとをりしを、もとよりひらきまちうけた
ることなれは、うつくしきてうのすかたにへんし、にはかにあめをふらせ、いかに御むまのしやうらうさま、たす
けたまへと申けり、もしよりつなハめいしんときくまゝに、ひらきをいたきあけ、わかむまにとうとのせ、わか身
もやかてりやうまし、ほりかはのひかしみなミむけてゆきけるに、おうきまちのこうちへすこしゆきつかて、その
かたちをおにと」[44]あらはし、つなかもとゝりをつかむて、あたこのたけをこゝろさして、あかりし、もとより、

つなはめいしん、はいたるたちハつるきなり、ちうに、つむときりはなす、ちからなくしておとしけり、つなハ、おにのてをきりたりとみやこにて、かうする、そのとききつたるたちまても、おにきりと、くわんとをなす
それかし、きくよりも、むねんさ申はかりなし、このてをハ、はつ[ま欠]そのために、つなかはこと[、脱、母御欠]、ミをへんし、わたなへより、はる〳〵とのほりたるふせいして、やう〳〵にもんたうし、こいとつて候ひたれハ、いまハなにのしさいもさふらはす、かやうのことをきくにつけ、よのけんそくもおちおそれ、いつることもさふらハす、なふ、きやくそう、とかたりけり
たとへハ、らいくわう、つななり」[45]とも、かほとにはんしやくたくミたる、いはやのうちへ、やふりいり、やはか、らうせきをはいたし候、このしやうのありさまを、こらんせよ、とありしかハ、あつはれ、しやうのけしきかなと、そらほめにに[衍欠]して、さしきになをる
とくのさけを、したい〳〵にゑひぬれハ、これなるきやくそうを、よく〳〵見申は、たゝいまそれかしか御物かたり申つる、らいくわうにてハましまさぬか、そのつきハ、ほうしやうのひとりむしや、そのつきハ、ひらきかてをきつたる、くせものつな、すゑ、三人[たけ脱欠]らうとうとも、いつとうあやしやと、ことのほかにいろめいたり
らいくわう、きこしめせ、こハいかなる御事候、われハ、これ、てはのくに、はくろさんのやまふしたりしか、こそより、くまのにとしこもりし、ミやこを一けんつかまつらはやと」[46]そんし、ふかくのミちにふみまよひ、このところへまいり、よもすから、御物かたり申事、ひとへに、こんかうとし[金剛童子]の御はからひとこそ、そんし候へ
しゆてんとうしきこしめし、けに〳〵これハたうりなり、たゝこしゆをきこしめされよ、つな、なのめによろこうて、とくのさけをつきかへおハしつゝ、ゑいけれハ、なをあやしけに見まハし、かゝるしゆゑんの見きりにハ、われも人も思ふことをかたるこそ、おもしろく候へ、それかしかひめにて候か、あれは、らいくわうにてハこさなき

か、うかりミつ、きこしめし、さてハ、八まんよりたまハりたる、はうしかふとをきたるによつて、すかたを見わけさるよとおほしめし、かミにたのミをかけ、いよ〳〵しんし給ふ

しゆてんとうしきこしめし、けに〳〵」[47]それハ、さあるらむ、たゝ御しゆを申せとありしかは、けんそくのおにをも、まふつ、うたふつ、のふたりけり、らいくわうのおほせに、これに候きやくそうに、こしゆなの一せつを、申さすへう候、きんときをさす、もとよりきんとき、あるあひた、つまくれなひのあふきをひらき、一せいをこそ、あけにけれ

[沽酒欠] [と脱欠]

としへぬる、こほくのえたに、はるもきて、かせやあそひて、花をちらさむ

とうたひけり

この一せいのこゝろハ、としひさしきおにともを、ほろほさんとする、こゝろなり、ろくはうしさいのおにともハ、申せとも、このことをしらさるハ、うむのつきたるところなり、かやうに、すこんにおよひ、思ひさしもおもひとり、まふつ、うたふつ、のむほとに、しゆてんとうし、とくのさけにゑひぬれハ、」[48]なふ、いかにきやくそう、われはさけにゑひぬれハ、いまハ御いとま申なり、それかしかたいくわんに、ねうはうたちをおき申、それそれ、こせたち、御しやくをしたまひて、きやくそうたちをなくさめ給ふへし、いとま申てさらハとて、いはやのうちにいり給ふ、けんそくのおにとも、とくのさけを一はいのミぬれハ、なつきうち、めまひ、五さう六ふをめくり、あるひハかミをかゝへて、ふしたるおにあり、六つうしさいのおになれと、とくしゆにゑひほれて、一のおにも、のこらす、ふしたりけり

そののち、らいくわう、二人のねうはうたちにむかひ、いかにこせたち、きこしめし候へ、われハミやこのものにて候か、ふつちん三ほうの御はからいにより、とうしにはやくたいめんし、とくしゆにてゑひふ」[49]せたれは、う

ちとらん事、うたかひなし、とうしかねやのうちへ、ミちしるへをめされよ
ねうはうハ、こいしきミやこへ、かへらん、又うれしさよ、そのきにてあるならは、しこくうつして、かなふまし、
又さかもりのうちに、これなるきんときも、らいくわうも、かくれなき、まひのしやうすとて、二三へんこそ、う
たひまひにけり

［絵　第十一図］
遠山と、花咲く近景」50・51
［絵　第十二図］
童子の前で、舞い歌う頼光たち
花園の姫君、国方の姫君」52・53

らいくわうのしやうそく、あかちのにしきのひたゝれ、ひをとしの御きせなか、くゝりをゆるりとよせ、こて、こく
そくにとつてハ、くもにほうわうのはいたてし、かすみにきかんのさうのこて、ひやくたんみかきのすねあてに、
ひおとしのよろい、くさすりなかに、さつくとめし、ゆつてうはおひ、しつかとしめ、ちすひといふかたな、一も
んしに、おさしあり、ひけけりの御はかせ、あしをなかにむすんて、八まんよりたまハりたる、かうしかふとのう
へに、しゝわうといふかふと、ふたはねかさねて、めされけり
のこり五人の人々も、おもひ〳〵のよろひかふとをき、おもひ〳〵のたうくをもち、ねうはうたちをしるへにて、
ねやにいりて、見たまへハ、四はうにたかくひをともし、まくらにハ大まさかり、あとにハ」54かねのはう、ほこ

なとをたてならへ、とうしかねたるすかたハ、よひに見しにハひきかへて、あらさるもの、けしきかな、かしらハ、おほうきう、かミあらく、さかさまにおひたるか、まつけ、まゆはしろくして、ひけまてもおなしけしきなり、ものによく〳〵たとふれハ、しろかねのはり、すりならへたるかことくなり、あしにハくろきけおへて[マヽ]、なかくしけりて、そのたけハ、二ちやうはかりにうち見えたるか、とくのさけにゑひふして、せんこをしらす、ふしたりける、六人の人々、あまりの事のすさましさに、あきれてたゝせ給ふ、そのゝち、いはやに山ふし三人たゝせたまひ、くろかねのなはをとりいたし、らいくわうにたひ給ふ、このつなをあしてにつけ、四はうのはしらにゆゐつけ、」[55]らいくわうハ、まくらより、ちすいをぬひて、くひをうて、のこり五人ハ、あとより、きつつ、つゐつ、するならは、おにハはなつく、ほろほすへし、いとま申て、さらとて[ハ脱欠]、かきけすやうにうせ給ふ

らいくわう、なのめにおほしめし、をしへのことく、したゝむれと、ちともさはくけしきなし、らいくわう、まくらより、ひけきりをぬひて、くひ一うちうてとも、おとろかす、ふたうちうてともおとろかす、三うちめに、おもひつる事よとて、かつはとをきんとしてあれハ、しはうへついたるなはにひかれ、くろかねの大りなれとも、やぶるゝほとそ、ゆつたりける、すきをあらせす、うつほとに、なつくくひをうちおとし、むくろハのこり五人のつよものよりて[わ欠]、きつつ、つひつした」[56]まへハ、あまたになつて、うせにけり、くひハそらへとひあかり、なかいかつち[長雷]としんとうし、とくをはいてまハりしか、らいくわうのめされたるかふとのうへゝおちかゝり、しゝわうといふかふとを、うらへ、くつとかミつなぬき、八まんよりたまハりたる、はうしかふとのうへに、はかたのつくほと、かみとをす、しんつうかふとにてあらすハ、らいくわうの御いのち、あやしかりつるものかな、ちすいをぬいて、とうしかくひ、かふとのうへてさしとむる

のこり五人のひと〳〵、とうしかかねのはう、ほこともをおつとつて、大にはへ、おとりいて給ふ。かつ〳〵しと

ころに、御からとうしといふおにか、この人々をめにかけて、おめきさけんてかゝりけり、つな、このよしを見るよりも、三しやく八すむの」[57]おにきりを、するりとぬひて、おつとりのへて、もつてひらいて、うつほとに、おんからとうしかまつかうを、二つにほつかときりわりたる

ふほうとうし、これを見て、あますな、もらすな、もつともとて、きんときに、きんてそ[マヽ]、かゝりけり、きんとき、なのめによろこうて、はうをおつとりのへて、かゝミうちに、ちやうとうつ、まつかうをうたれて、たゝよふところを、きんときかさねてうちけれハ、ゆんてめてへ、はつけたり、きんときなのめによろこうて、ほそミのたちをするりとぬいて、ふほうとうしかほそくひを、ミつもたまらすうちおとす、かつ〳〵しところに、もんよりそとに候ける、はんをするおにとも、このよしをきつと見、おもひつることよとて、おめきさけむ」[58]てかゝりける、六人のひと〳〵、かふとのしころをふりかたふけ、きつさきをそろへて、わつといひて、きつている、にしからひかし、きた、みなミ、くもて、かくなは、十もんし、八はなかたといふものに、ちやう〳〵ときつてそまわりける、ろくつうしさいのおになれとも、きつてのやうをしらすして、くつきやうのけんそく十三き、きりふする、のこりのおにともこれを見て、かなハしとや思ひけん、はら〳〵とにけにけるを、ここににておつつめ[に衍欠]、ちやう〳〵とうち、かしこにておつつめ、うつほとに、廿人のはんしやを一きものこらす、うたれにけり

［絵　第十三図］

左の一文を挟んで描かれる縹渺たる山と雲は、千丈ヶ嶽か」[59]

ねうはうたちをしるへにて、ねやのうちへそ、いりたりけれ」[60]

［絵　第十四図］
右、頼光ら、花園の姫君・国方の姫君に導かれ、
酒呑童子の寝屋へ行く。左、門に一人の番卒」[61・62]

五人のひと〳〵ハ、あとより、きつつ、つひつ、し給ふなり、らいくわうハ、くひをうちおとし給ふ
さて、しゆてんとうしのくひか、とくをはひてまハりしか、らいくわうのめされたる、かふとのうへにおちかゝる

［絵　第十五図］
山の断片」[63]
［絵　第十六図］
綱・金時・武光・末武の四人、手足を柱に結いつけられた酒呑童子に斬りかかる（本文は56に目）」[64]
［絵　第十七図］
酒呑童子の首、頼光の頭にくいつく」[65]
［絵　第十八図］
逃げる鬼たち、追う頼光
［絵　第十九図］
ふほう童子・おんから童子に斬りかかる公時と綱」[68]（第五十八紙の次にあった筈）
［絵　第二十図］

鬼たちに斬りかかる頼光・保昌・貞光・綱」[70]

［絵　第二十一図］

鬼たちに斬りかかる末武」[71]

［絵　第二十二図］

鬼を追う保昌」[72]

六人のひと〳〵、おくに入て見たまへハ、とうしかこんしやうにありしとき、きん〳〵のちりはめ、はんしやくをたゝミたるいはやのうちに、人のほねのあたらしきもあり、ふるきもあり、かたハらを見たまへハ、さもうつくしきねはう[う脱]の、かたてなきも候、いかなる人そと、とひ給ふ、ミやこのせうしやうとのゝ、ひめきミにてましますか、この四日さきに、みより、さけをしいりしか[ほ欠]、つゐにむなしくなり給ふ

らいくわう、なミたをなかさせ給ひ、あら、いたハしや、われ〳〵、この事を四五日さきにくわたてなハ、なんなくたすけ申へきに、をなしよみちといひなから、いんくわのほとこそ、いたハしけれ、なふなふと、のたまひて、はら〳〵となき給ふ、卅四人のねうはうたち、みなミたをそ、なかしける、いきたるねうはうハ、らいくわうを見て、うれしなきになき給ふ也」[73]

［絵　第二十三図］

頼光ら、三十四人の女房衆を見出す。白骨あり。死臭、鼻をつく。」[74]

なをしも、おくのいハやか、あやしく候と、ありしかハ、おくのいはやへをしよせ、ときをとつとあけ給ふ、かつ〳〵しところに、いしくまとうし、かなくまとうしと申、大ちからのおにとも、とくしゆにゑひほれて、せんこもしらず、ふしたりしか、ときのこゑにおとろき、てつちやうをおつとつて、わつといひて、うつてハ、さん〳〵にたゝかひ、くたひれけれハ、いはやへいり、いきをつきて、うつていつる、かやうにすること、とゝにおよへり

らいくわう、御らんし、いやいや、ふかくしてハかなふまし、まつ、われ、そらにけをつかまつらん、さためて、かのおにとも、をつかくへし、そのときわれら、いのちをすて、かへすへし、もつともとて、みな〳〵はうはうへにけられたり、あんにもたかはす、かのおにとも、あとをしたふて、おつ」[75]かくる、らいくわう、このよし御らんして、かへせ、ミかたのくむひやうとも、われおとらしとかけもとし、まんなかにおつとりこめて、こゝをせんとゝ、たゝかひたり

いしくまとうしといふおにも、つゐにそこにて、うたれてけり、かなくまとうしといふおにか、ちからをたのふて、てつちやうをなけすて、きんときとよせあわせ、むんすとくんて、うへをしたへと、あらそひしか、きんときよはくて、したになる、のこりの五人がおりあひて、てとりあしとり、七すちのなハをかけけり

［絵　第二十四図］

公時を、いしくま童子から助ける頼光・貞光・綱・保昌。後ろから駆けつける末武」[76・77・78]

みやこにつきしかは、そうもん申されけり、御かとよりのせんしに、しこくうつしてかなふまし、とく〳〵きたれと欤□せんしある、うけたまはると申て、らいくわうのたち、六□せう欤かハらにて、きられたり、しゆてんとうしか

くひと、かなくまとうしかくひと、いしのからひつにおさめおき、さかのほ□[り欠]にうつまるゝ、これをむねんとおもひて、なやまする、たうたいにいたるまて、[みせけち]さかやみと申事、かのおにのしよいてにありみかとよりのせんしに、しんへうにつかまつりたり、たゝいまのくんこうに、たんこ、たんはをくたさるゝこと、せんしをかうふり、あけのひにもなりしかは、しよちいりとこそきこえけり、まつたい、こうめいためしあらしと、おほえけり、世四人の女はうハ、なのめによろこひ、かへりけり」79

［絵　二十五図］

頼光の一行、かなくま童子に酒呑童子の首を背負わせて山を下る。世よ人の女房衆もともに都へ帰る。」80

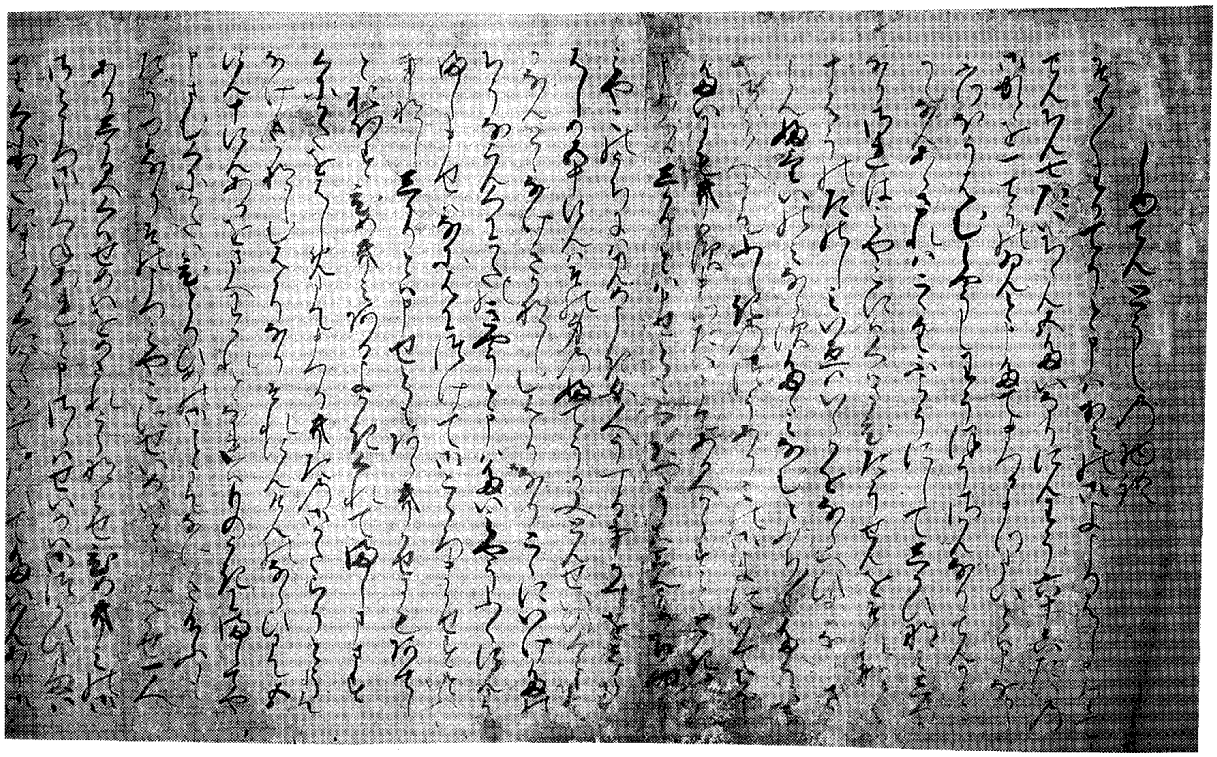
［絵　第二十六図］

頼光ら、六条河原で、かなくま童子を斬る

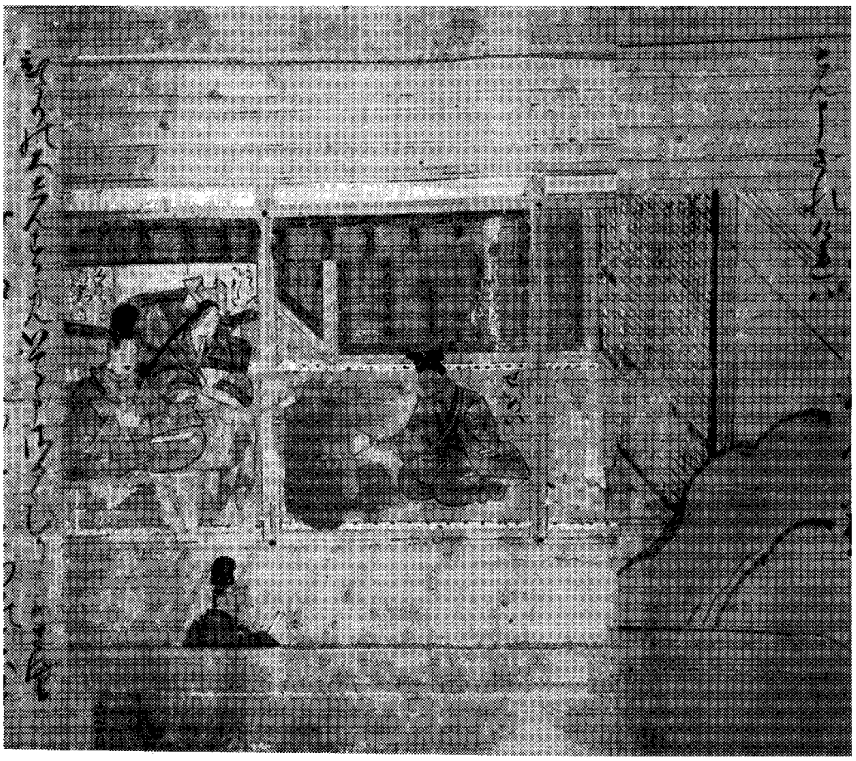
桜の下の見物人あり。」81・82

［絵　第二十七図］

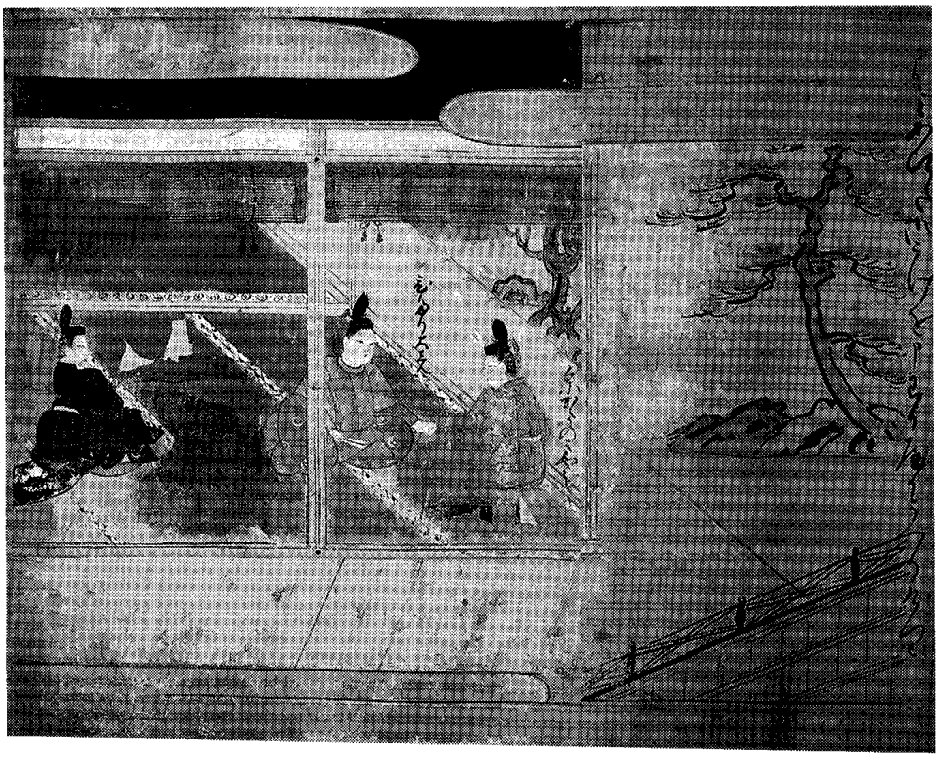
頼光ら、騎馬にて丹後国へ所知入りする。頼光の前に三人の供、後に「とう三ら」。一行の後に、「屋七・ひろ八・けんろく」の三人が従う。」83・84・85・86



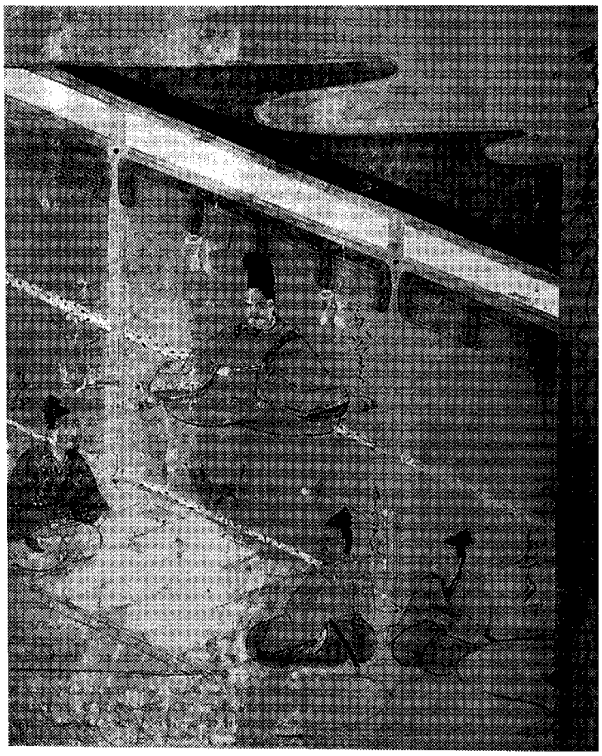
巻　頭



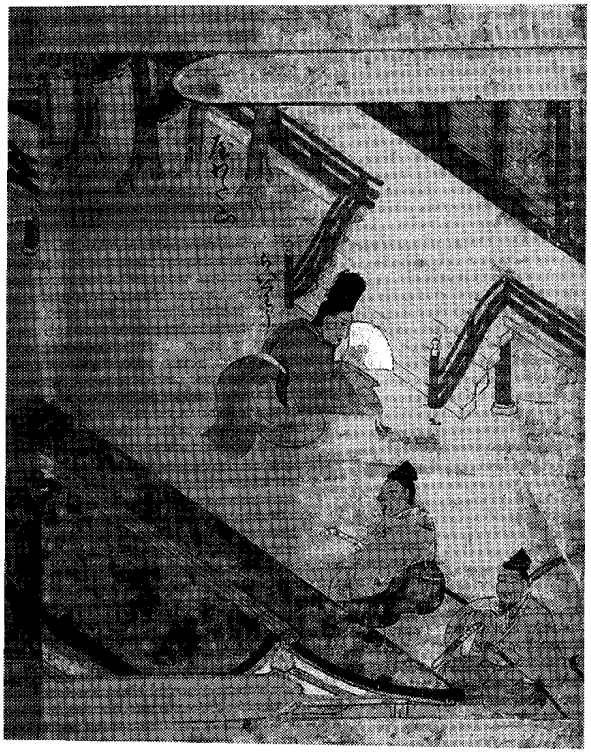
第一図



第二図

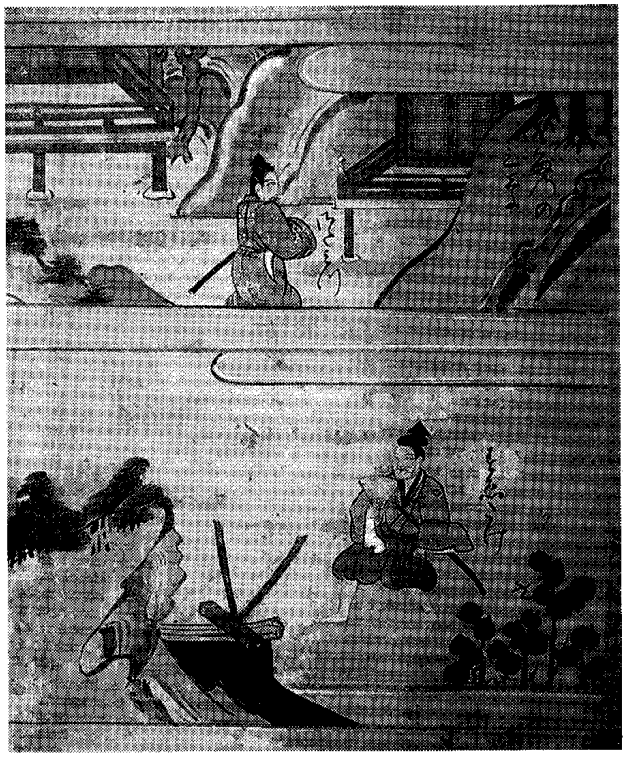


第三図

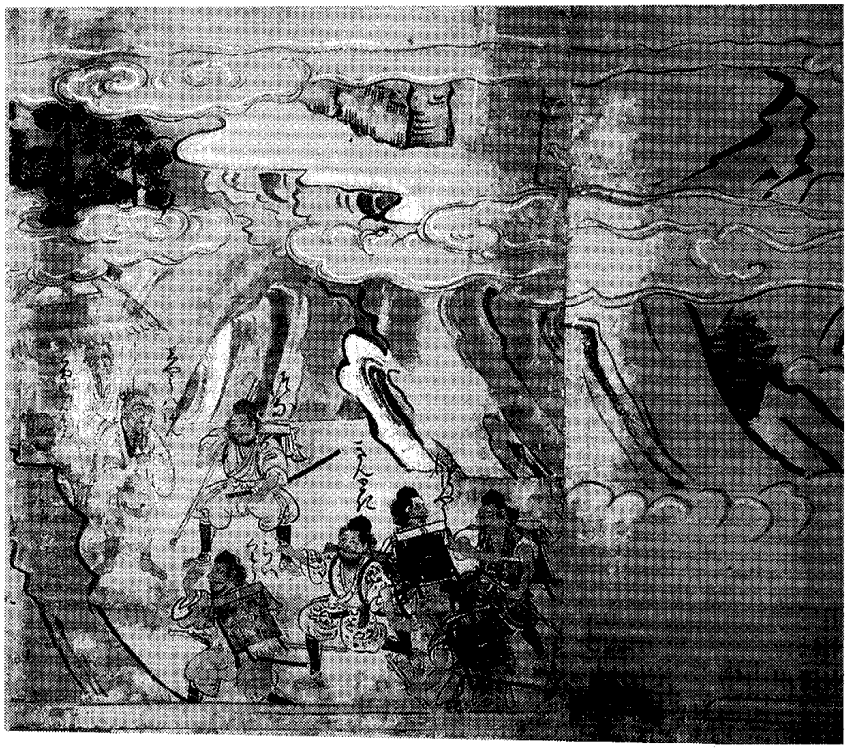


第四図

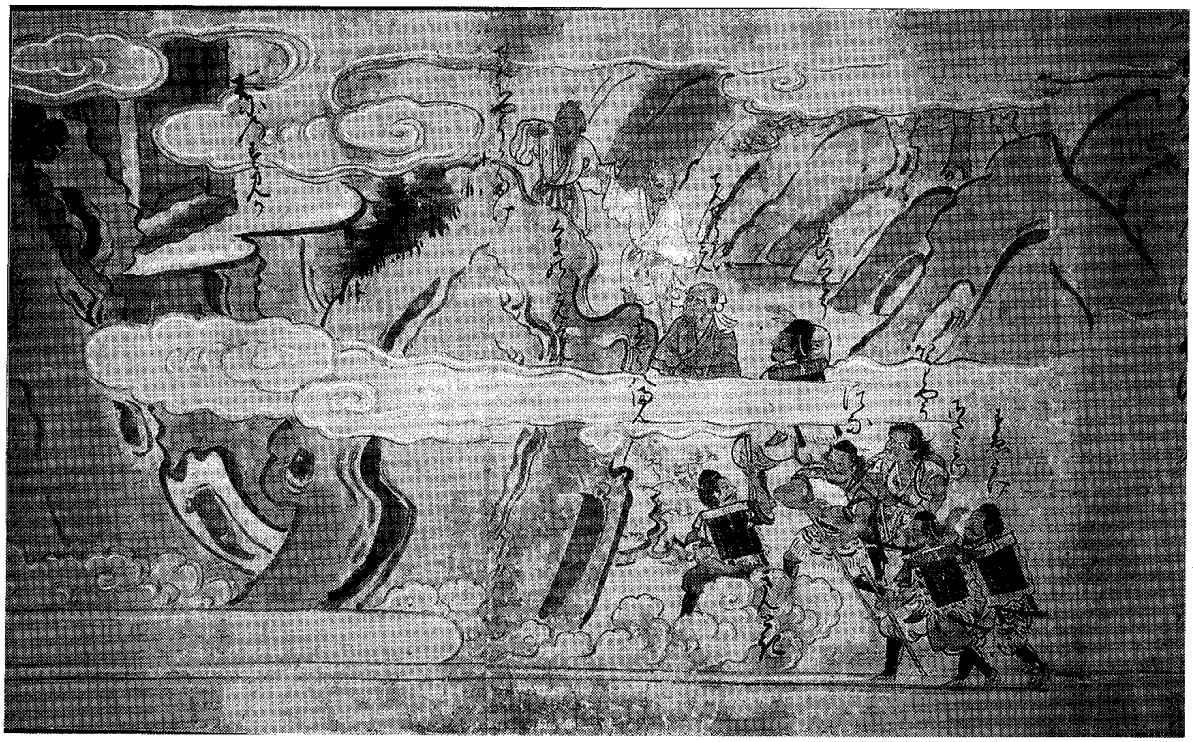
第五図



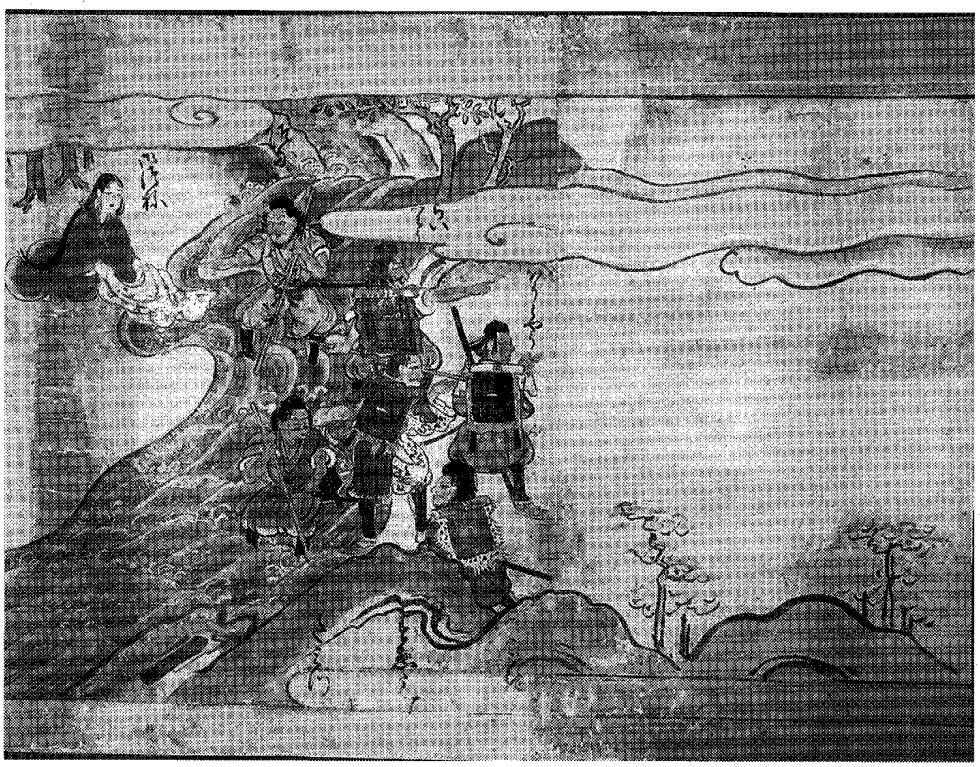
第六図



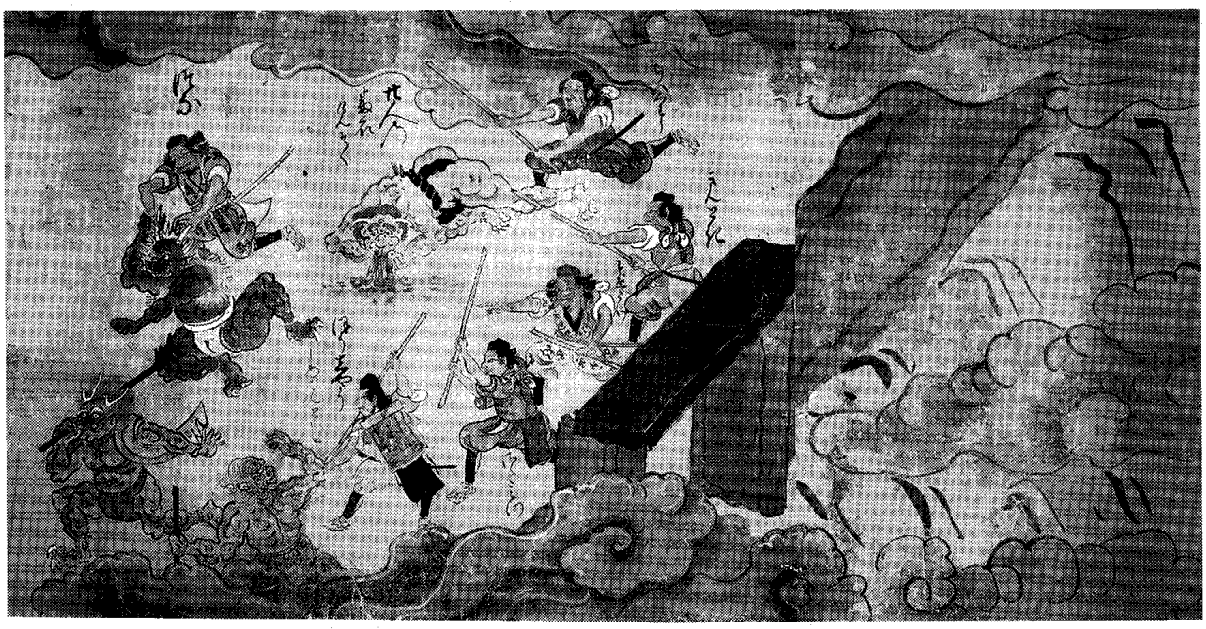
第七図



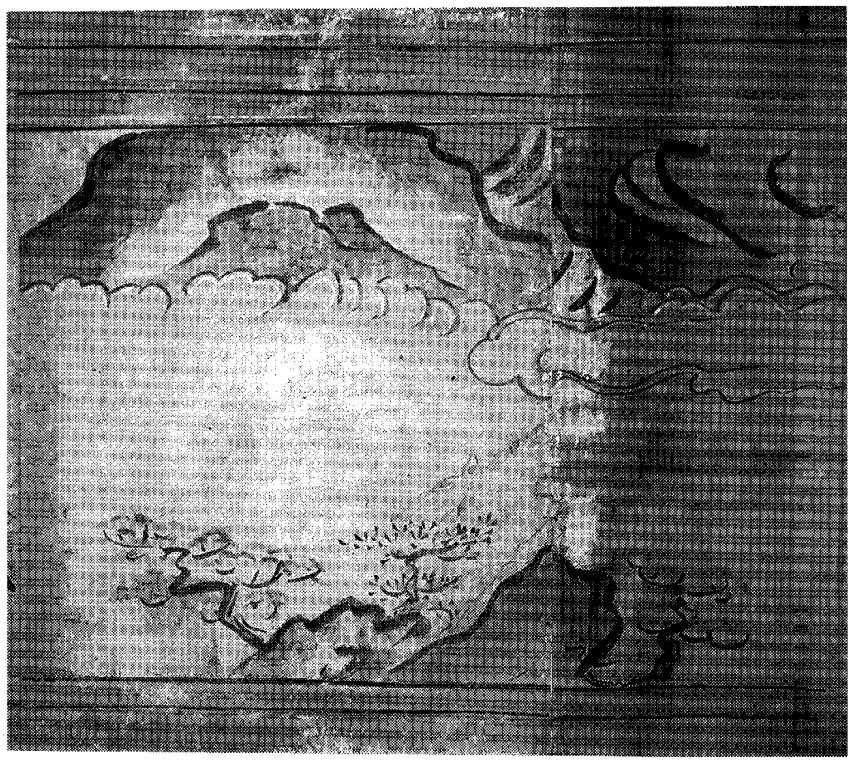
第八図



第九図



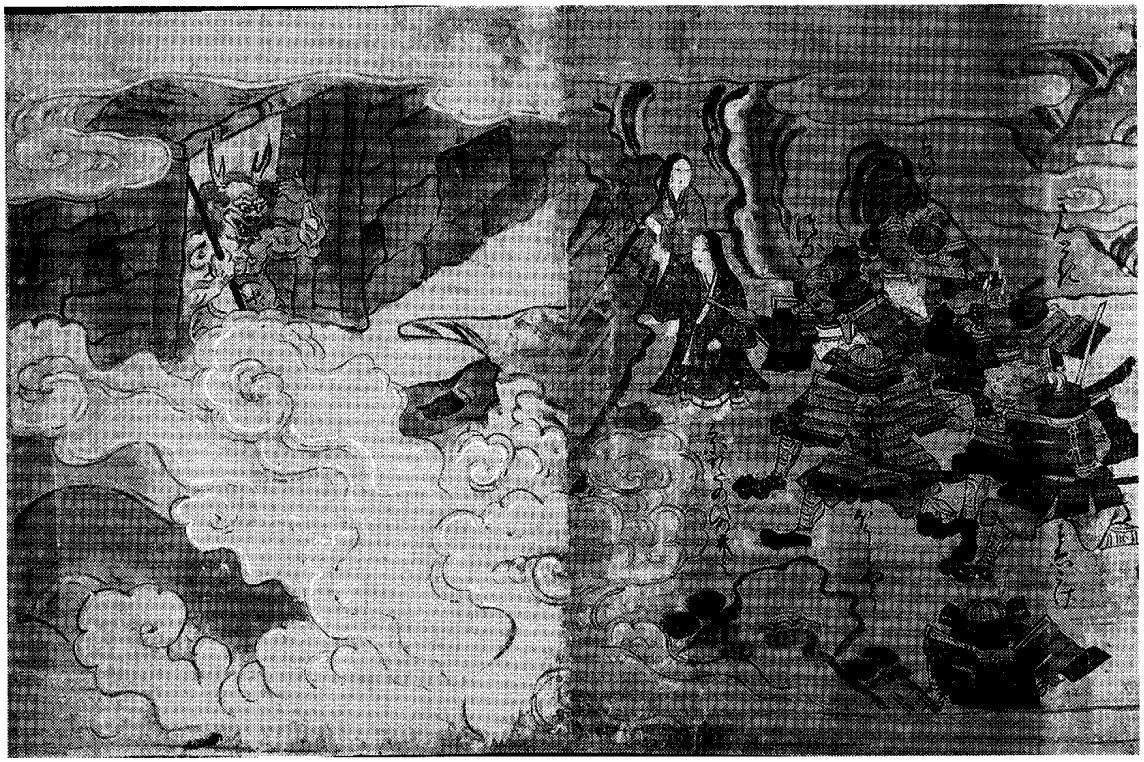
第十図



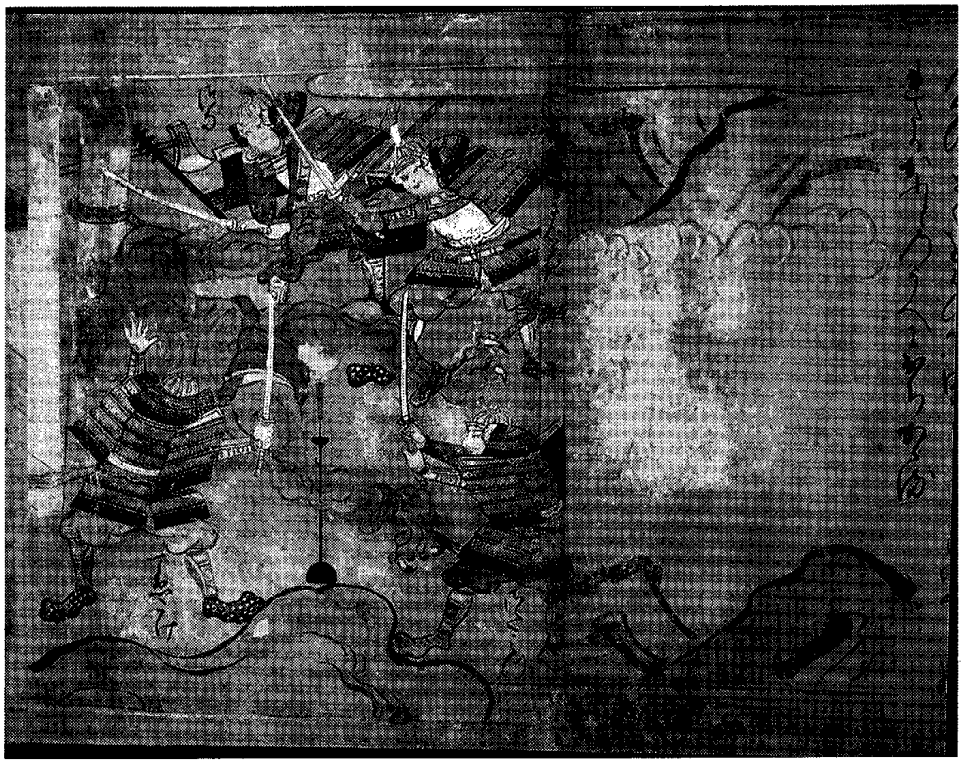
第十一図

第十二図

第十三図

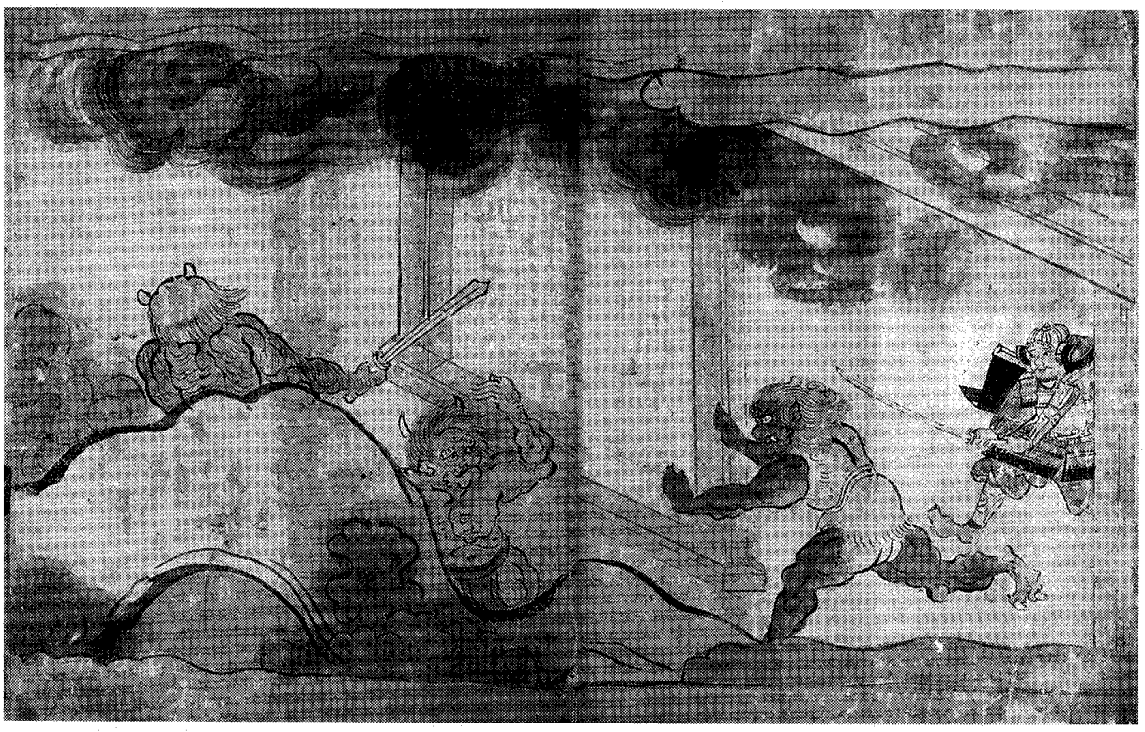


第十四図



第十六図　　第十五図

第十七図



第十八図

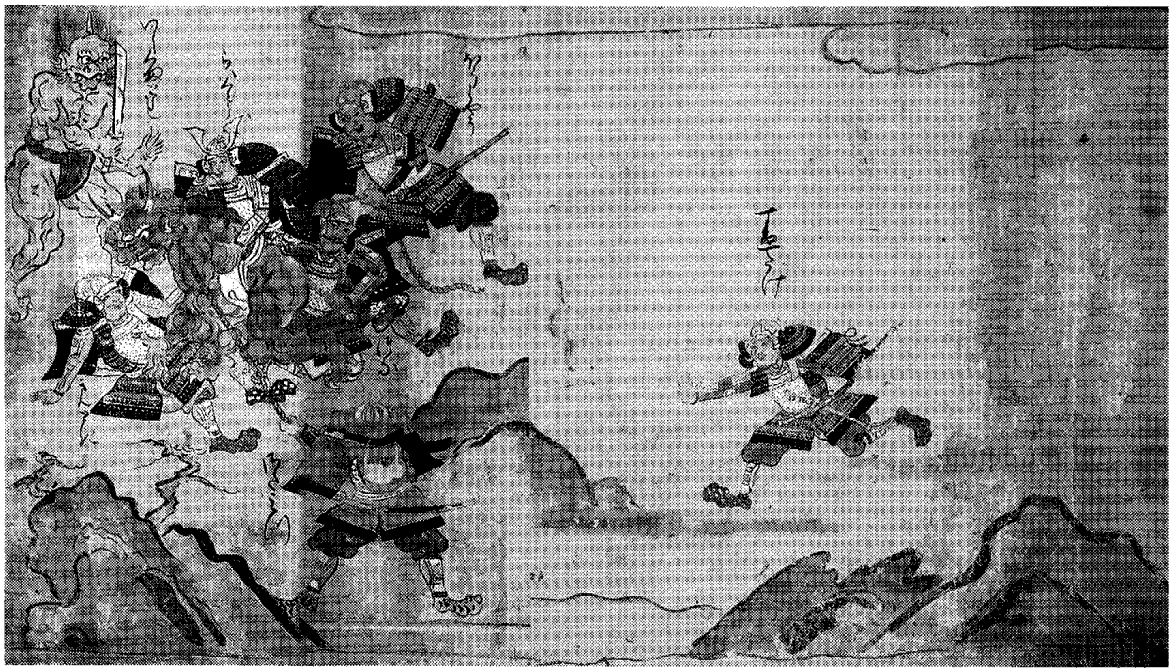
第二十図

第十九図

第二十二図

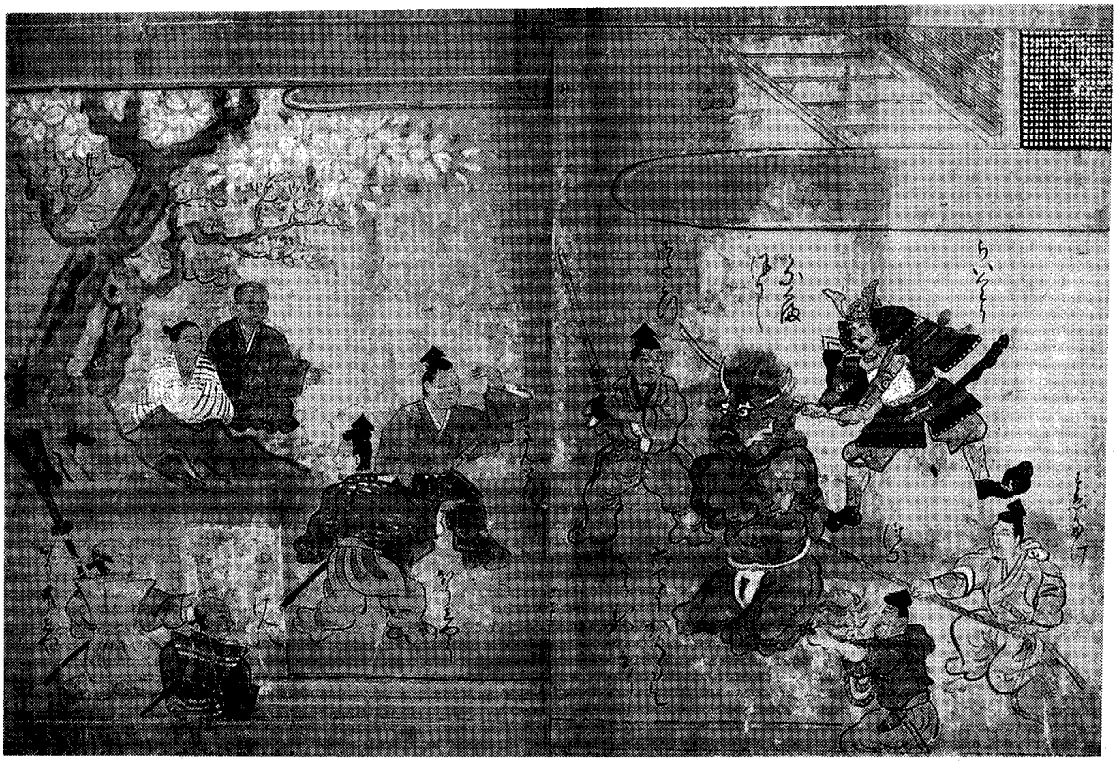
第二十一図

第二十三図

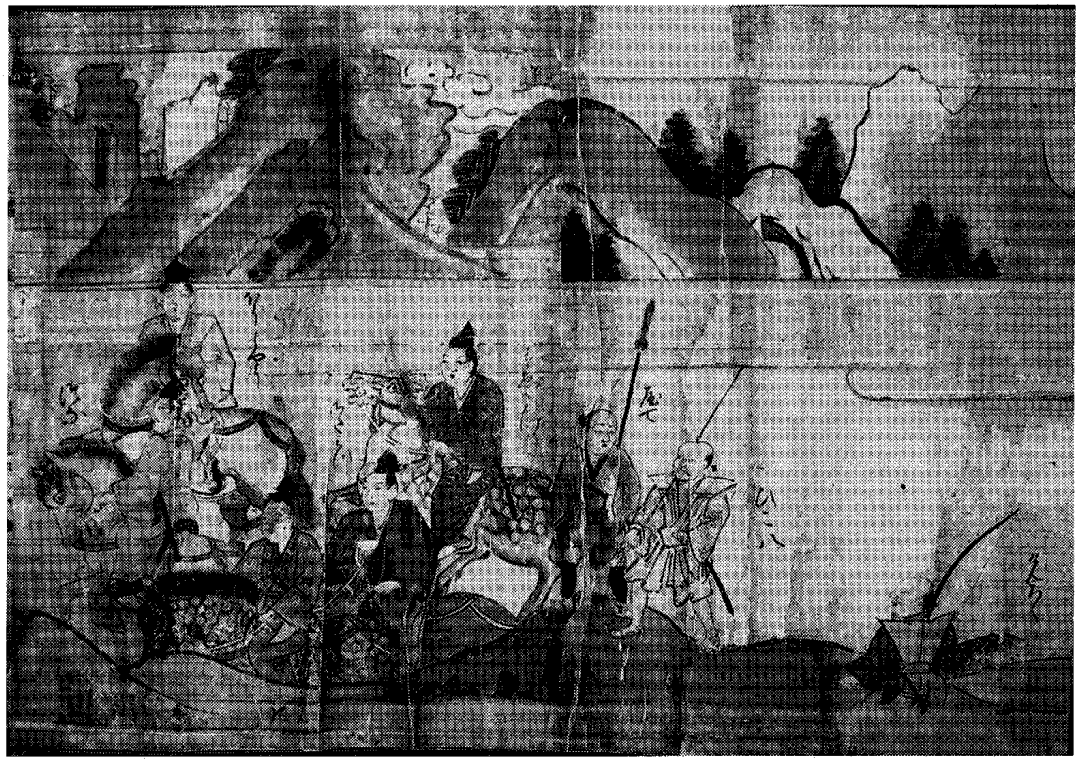


第二十四図

第二十五図



第二十六図



第二十七図（右）

第二十七図（左）